静かに気温が高まっていく朝方、冷めた自分と目が合う度に何故お前はそんな顔で平気に生きているんだと糾弾する声が聞こえる。微風が頬を撫でる程度の、鈍い正義。

それが次第に頭の後ろに遠ざかっていく頃が、出勤の時刻だ。

身支度を終えて戸締りを最後に確認してから、アパートを出る。

競り立つような入道雲が分かりやすく夏を描く、空の下を行く。

まるでなにも背負うことなく、道行く人たちに溶け込むように。

そこまでは、いつもの通りだった。

昼休み、教科準備室に戸川さんが姿を見せるのも普段通りと言えて。

違うのは、そこからだった。

「……ちょっと、あの、分からない」

戸川さんの提案のレベルが高すぎて、私がいくら背伸びしようと理解が追いつかない。

戸川さんは私が固まっている間、お弁当箱の中身を覗いてしょんぼりしていた。

「せんせぇ野菜多いよー」

「それはいいの……そうねもっと戸川さんの好きなものいっぱいだと見ている分にも楽しいよね戸川さんはやっぱりお肉が好きなのかなぁ今度は彩りを大事にしてみたいところだね」

「お弁当の話題で流そうとしても駄目だよ、せんせ」

話を振ってきたの戸川さんなのに。

「それで……えぇと……なに？」

「せんせぇと下着交換しよって」

「……聞き間違いであってほしかった」

額に手を当てて顔を伏せる。

「そもそも、下着を交換……とは？」

「下着を交換することですが……」

どうも受け入れないと会話が進まないらしい。……進めないと駄目なのだろうか？

「それって、今……履いている、のを？」

「眠くなる午後の授業にちょっとした刺激をと」

私の理解が及んだことにニコニコしている

「私は眠くなりません」

「わたしもせんせの授業は眠くないなー。せんせぇを見るのに夢中だから」

「…………ぅ」

嬉しいな、じゃない。飛びつきそうな本音を喉の奥へと、目を白黒させながら押し返す。

「授業中は、私じゃなくて黒板を……見ましょうね」

一応、教師として弱々しく咎める。一応。本当に一応、立場だけの教師として。

「せんせぇが美人すぎるから悪いんだよ」

「いいから授業をえ、ちゃんと……それで、交換して、なんの意味が？」

「ドキドキする！」

それが心からの楽しみであるように言い切って、そして、それ以外の理由はないみたいだった。ああ、と思う。この子は、私と秘密を共有したいのだ。私と戸川さんだけの繋がりを、世界にたった一つだけのものを、渇望している。下着を交換して、授業を受ける私を見て。

自分だけがそれを知っているという、優越感と安心を得たいのだ。

この子の強い独占欲の発露は、私が戸川凛のどこを愛するかということについての分かりやすい指針になる。愛してしまう、時に暴力的にも陥りそうな、深く鋭く真っ直ぐな愛情を。

「そっか」と戸川さんが寂しげに目を逸らして笑う。絶対、演技だと一目で分かった。

でもそんな顔をされると胸が痛くなるので、どうしようもない。

「わたしが履いてた下着なんて汚いから、やだよね」

「そんなことない」

釣られていると確信しながら、物の見事に引き上げられた。

戸川さんの肩を掴み、その頬に触れる。

私は魚として生きていたら、あっという間に釣り上げられて終わるだろう。だから、人間がいい。もしも次なんてあるのなら、また私でいたい。私として、戸川さんに、巡り会いたい。

思考が派手に飛躍しながらも、視線は片時も戸川さんから離れない。

「戸川さんは世界一綺麗で、いつでも触れたくて、触れると好きが、止まらなくて」

私はきっと、美しくて、眩いと思えるものしか抱けない。

そしてそれは、戸川凛しか該当しない。

私にその概念を切り開くきっかけとなった彼女にしか、輝きは見えなかった。

私の明け透けな愛情に、戸川さんの頬がゆーるゆるになる。

「じゃあ交換ねっ」

「じゃあの意味が分からない」

分からないけど、押し切られる予感しかなかった。私に戸川凛を拒むという答えはあり得ないし、戸川さんもそれを確信して無防備に甘えてくる。抱えて、すべてに応えられるか不安になりさえする全面的な信頼。一人の人間の人生が染み込んだ雨垂れが、容赦なく私に降り注ぐ。

……そして、結局。

耳鳴りがするほどの緊張、眩暈を伴う現実が、私にやってくる。

熱気の滲む小さな準備室で向かい合って、私たちは。

生徒の前で、下着を脱ぐ。教師の前で、教え子が下着を脱いでいる。

なにこの状況、と心臓がすり潰されそうなくらい胸が圧迫される。服を着こんだままお互いにスカートの中へ手を入れていて、耳まで赤く、時折目が合い、いたたまれなくなり、困ったように笑う戸川さんの歯の白さを思いながら、下着を、おろ、す。太い線を断ち切るように、ぶつりと自分の中でなにかの切れる音を聞きながら、校内で下着を脱ぐ。

決して涼しくない室内で、下半身の風通りを錯覚する。錯覚なのだろうか？

足下が一気に頼りなくなってよろめきそうになりながら、戸川さんを見ないで下着を突き出した。早く取って、と切望してぎゅっと足の指に力がこもる。

その下着が自分の手元から浮くように離れると、やすり掛けされた心がそのまま擦り切れそうだった。

「わ……せんせぇの……」

手に取った私の下着をまじまじと凝視して「やめて」手を激しく振って、早く履いてと催促する。戸川さんは名残惜しむように下着を指に引っかけて、なにを想像したのか、一気に頬を赤く染める。自分で提案しておいて、顔をまっ赤にするのは……かわいいけども……。

「じゃあ、はい……わたしの……」

見ているだけで目が潰れそうな後ろめたさが湧き上がる。戸川さんの手にある、下着を、掴む？本当に掴むの？なにをしているんだ私？手に取る。

その質感が手のひらと指の付け根を包んで、悲鳴を上げそうになる。

午前中、戸川さんがずっと履いていた下着を握りしめている自分を見下ろす。

「…………………………………………」

急速になにかが競り上がる喉に、ぽつぽつと、汗が浮かぶ。

私がなぜ、まだ死んでいないのか。誰か教えてほしかった。

生きるとは、と下唇を震わせながら、交換した下着に恐る恐る足を入れる。冷たいわけではないのに、下着が肌に触れるだけでびくりと飛び跳ねそうになった。足がゆっくり下りていく度、ぞぞぞぞと背中に刺激が満ちる。直視していられなくて目をつむりながら作業して、急に床に足がついたことにびっくりしてそのまま後ろに転びそうになった。

こうして私たちは、また、危うい遊びに手を出す。

「……なんか、すっごい意識しちゃう」

履いてスカートを整えた戸川さんが、俯きがちに笑う。まったく同じ感想だった。

普段と形状は変わらないはずなのに、自己主張が強くて収まりが悪い。

それこそ、ずっと戸川さんに。

「ずっと、せんせぇに触られてる感じ」

「……私は、ずっと触ったりとか」

思い返したように、戸川さんがぎゅっと、やや強く目尻を引き締めてこちらを見つめてくる。

「しまぁー…………」

「……………………すね」

終わりだった。先日の情景まで思い浮かべて、腫れぼったい耳がちぎれそうだった。

だって、だって、だって。

連動する戸川さんの腰の反応が、跳ねる声と相まって……目を伏せる。

闇に浸る。

そのまま二度と戻ってこなくていい、と痛切に願った。

そんな昼休みを終えて、移動する間。

いつまでも腰が据わらず、足がうろうろしそうになっていた。

それから午後を丸々、戸川さんの下着で過ごすという事実にきが遠くなった。

耐えがたいほどに秒針の動きを遅く感じる。どうして授業がこんなに長いんだ、と学生の気持ちを取り戻しそうになる。誰にもバレるはずはなく、露見したら即座に終わるとしてもそれを判別できるはずなく、だとしても心臓は焦燥を繰り返す。

しかも今日は、ちゃんと担任のクラスで授業がお昼から残っている。

午後から現国の授業がある曜日をちゃんと選んで提案してきたのは想像に難くない。やめてほしい。教卓に上がるために足を少し上げただけで更に意識が深まって、小さく悲鳴を上げそうだった。

戸川さんの下着を履く私への、生徒からの目線に変化はない。あるわけがない。

ただ一人を除いて、私の本当を知る者はいない。

きっとそれが、戸川さんの見たいもの、求めているもの。

分かる、分かるけれど。

せめて下着以外になにかなかったのだろうか。

授業中に戸川さんと目が合うと、そのまま廊下へ逃げ出したくなる。この情動を、平静を装って流して授業を続行しなければいけないのは人格にかなり無理が来そうだった。

内心、授業どころではなかった。また戸川さんも話なんて上の空で、私の腰元を注視しているだろう。視線を感じる。戸川凛の目の動きを、ちゃんと他と別物に感じ取れる。

そんなことをこの状況で喜ぶな、バカ。

教職に在りながら、授業を不倫相手との玩具にしている自分を呪う。

表面上には残っていたかもしれない誠実さの欠片まで排除して。

そう、完全なる淫行教師へのみちが、また一つ満ちるのだった。

こんなにも時間を長く感じたのは、戸川さんが怒って学校を出て行って、

気が気ではなかった日以来で……意外と最近のことじゃないか、と呆れる。しかもあのときは心配からだったけど、今度は……浮気相手との、愛の昂ぶりだった。

それも放課後になって、ようやく終わりを迎えたことに安堵する。

後は戸川さんと……どこで下着を交換し直すのかとふと今まで気づかなかった疑問に辿り着き、その間に当の戸川さんは軽やなに教室を出て行こうとしてしまう。

待ってと思わず呼び止めそうになって、でも止めてまだ人目のある教室で言い出せるはずもなくと急停止して、中途半端に腕が空を切る。そうした私を見透かすように視線を寄越して微笑んだ戸川さんが、爽やかに手を振って教室を去った。

帰っちゃった、戸川さん。私の下着と一緒に。

……私の下着……。

「やられた」

黒板に寄りかかって、天井を仰ぐ。

スカート越しに、戸川さんの下着を否応にも意識する。

これで私は今日、下着の交換のために、戸川さんの家へ寄らざるを得ない。なんてひどい字面だろう。でもきっと、それが戸川さんの狙いなのだ。もし行かなければ、私の下着で戸川さんがなにをするのか……私は戸川さんの下着を家に持ち帰って……一人だったら、その場で黒板に頭を叩きつけていただろう。他の生徒の目もあって、深呼吸でなんとかやり過ごす。

戸川さんは私を家に招くために、毎日こんなことを考えているのかもしれない。

ふ、ふ、と変な笑いが漏れそうだった。

緩んだ口の端から、とがわさんのしたぎ、と教室で思わずこぼれそうになる。

目をつむり、大きく息を吐いて。

目を閉じていると暗闇に戸川さんの下着だけが浮かび上がりそうで、慌てて開き。

学校を出るまではまた、先生に戻る。

女の顔を見せられる相手を想うだけでひび割れそうな薄っぺらい教師を、被った。